

想定外を想定する、その時守るべきものは何か、

山田第一保育所の現地調査から

決断とエピソード

51日目以降		27～50日目	20～26日目	19日目	11～18日目	11日目	6～10日目	3～5日目	3日目	2日目	震災発生当日				
6月以降	5月	4月7日～30日	3月31日～4月6日	3月30日	3月22日～29日	3月21日	3月16日～20日	3月13日～15日	3月13日	3月12日	3月11日17時頃	3月11日15時25分	3月11日15時22分	3月11日14時49分	3月11日14時46分
近所のスーパーマーケット再開	仮設住宅の入居開始	※ガスはプロパンガスボンベ使用のため震災直後から使えた 全国からの支援物資が届く	4月15日水道復旧 4月22日固定電話復旧				3月16日 （A社、S社の復旧は5月以降）		重機による瓦礫の撤去開始		火災の拡大、日没	火災発生	大津波発生	大津波警報発令	大地震発生
7月31日保育所復興夏祭り	全国各地から保育士派遣 登園する園児が増えてくる	4月14日全私保連と 岩手私保連の第二次調査団来所	◎保育所再開 在籍74名中当日の参加25名	保育所再開の準備と 4月6日全私保連と 岩手私保連の第一次調査団来所	卒園式 出席園児17名 欠席園児4名 理由 保護者と帰省1名 町外へ避難2名 行方不明1名	職員出勤 卒園式を30日に決定	園内の清掃 被災した備品の処分 園庭の瓦礫撤去作業 卒園式の準備	全職員が休暇取得 園内の清掃 園庭の瓦礫撤去作業	◎保育所の休所を決定 迎えに来られない保護者の所在 がわかり職員が徒歩で最後の園 児1名を送り届ける	地域指定避難所から 保育所隣のお寺に移動 震災翌日迎えに来なかった 園児5名の交通手段がなかった	火災拡大のため 地域指定避難所へ移動 （三次避難） 震災当日迎えが来なかったため 避難所で園児12名が宿泊 （職員13名も宿泊）	園舎一階の床上浸水	地震後迎えにきた保護者への 園児の引き渡し61名 大津波警報発令により園庭から さらに裏山の高台へ避難 （二次避難） 避難した園児32名 （同伴保護者12名）	在籍園児数106名 出席園児数93名 （早退2名 欠席11名） 午後からの目覚めの時間 長く大きな揺れが続くため 園庭に避難（一次避難）	
夏祭りの開催を被災された方々がどう思うか心配だったが、結果的にやってくれて良かったの声を聞き安心した。	仮設住宅の入居開始と共に園児の登園数も増えてきた。 ↓各地より保育士の派遣を受け、乗り切ることが出来た。	新年度在籍園児74名中25名の出席しかなかった。 ↓運営費は在籍者数分支払われたので町の対応に感謝。	栄養面での配慮はできないが、再開初日から完全給食を実施した。 ↓子ども達の安定した生活を少しでも早く取り戻したい。	電気が復旧することにより、生活がかなり暮らし易くなる。 全私保連・岩手私保連の来園がとて嬉しく、心強く感じる。 組織に加盟していない町内の保育所への支援も嬉しかった。	卒園児に行方不明者がいる中で卒園式にテレビの取材がきて困惑する。取材の可否は保護者に委ねた結果、取材OKとした。	卒園児にけじめをつける意味で卒園式はなんとしても行いたかった。	一度泥をかぶった備品は一見普通に見えるが、匂いや衛生的に使用できないと判断し処分した。 津波の際、園庭に押し寄せた泥にガラスの破片が多数あり、拾いきることはできなかった。↓後日園庭の土の入れ替えを行う。	保育を行える環境の復旧に努めていたが、職員自身も被災者であり、家庭のことを考慮し休暇を取る。 職員の死亡状況（24名中） 職員の死亡・行方不明 20名 家族の死亡・行方不明 20名 家屋の流失・全焼 13名 車両の流失・全損 13名 津波等による退職 25名	職員で手分けし安否の情報収集を行う 園児の被災状況 家族の死亡・行方不明 493名 家屋の流失・全焼 47名	一般の避難所において子どもの存在は疎まれることもあることを配慮し、保育所近くのお寺に移動する。 ↓結果的に津波は園庭まで押し寄せ、難を逃れた。 ↓避難力では高台に登ることができず、おんぶひもが良い 大津波警報発令後に迎えに来た保護者には留まってもらい園児と共に避難を促す。 ↓保護者と園児の安全の確保と、園児の避難を手伝ってもらった。	火災の延焼が続き、更なる避難場所を求め移動する。 ↓所長が職員に帰宅を指示したが職員は帰らなかった。 ↓帰宅しないことを受け入れる。職員には申し訳なかったが、その責任感を誇りに感じた。	地震の際の基本である園舎内の落下物、園舎の崩壊を想定し園庭に避難する。 ↓引き渡しにはいけなかった。一緒に保育園に留まってもらうべきだった。			